

**2月18日ゼミは開催します****江戸期日本を見直すⅡ—江戸期遺産の再評価**

2023年2月18日ゼミ紹介文—齊藤 潔会員記

前回ゼミ(2020年1月11日)では、「江戸期日本を見直す」として、政治・外交編を取り扱いました。今回は、続編として経済・社会編を取り上げます。

前回ゼミの紹介文で触れましたが、明治期に西欧から直輸入した「歴史三分法(近代・中世・古代)は、現在では、原始・古代・中世・近世・近代・現代(戦後)」という歴史区分になっています。西欧でもルネッサンス以降の絶対王政期を近世と位置付けています。日本では、江戸期は中世ではなく、近代(明治期から昭和戦前期)との間に位置づけ近世としました(高等学校教科書)。

今回、私が江戸期を深堀してみても気付いた事は、徳川氏という武家による全国統一政権が形成した平和な日本が、近代を準備しただけではなく、現代社会の底流として生きており、それが日本の社会通念と日本人気質となっているという事です。しかし、反面、明治維新政府は、自らを正当化する為に江戸期を全面否定しました。結果、明治以降の社会は、江戸社会が創造した中国文明や西欧文化を相対化し、日本化した知恵(和魂漢才・和魂洋才)と実績に学ぶことを放棄し、近代化を西欧化と短絡化して、西欧文化の模倣と追従に勤しみ、近代日本は、大きな損失(戦争と亡国)を被りました。戦後も、欧米文化への憧憬は続き、復興は成し遂げたが現在の日本は、大きな自信喪失状態にあります。ここで、一度、アジアの立ち位置に戻り、日本を見直してみても如何でしょうか。そのヒントは江戸期にあるのです。今回のゼミでは、江戸期の経済や社会に焦点を当てて、以下の範疇を取上げて、再考の一助としました。

記

- 1、江戸期のGDPの国際比較
- 2、森林破壊とその教訓
- 3、小農経営と勤勉革命。モノづくり社会の誕生。

- 4、初期資本主義時代＝産業革命無き市場経済・信用経済。
- 5、富裕者と有徳人。高かった女性の地位。
- 6、現代の生活習慣の原型。旅と富士山。
- 7、合議制の社会。村八分の真相。談合(紛争解決の知恵)。公事宿。
- 8、犯罪と殺人の少ない社会。罪刑法定主義。
- 9、現代の風景の原型は江戸期に形成された。
- 10、神仏習合—宗教の呪縛からの解放。
- 11、靖国神社と怨親平等。
- 12、幕臣小栗忠順の遺産とベルツの予言。以上。

**ゼミ会場と時間13:15～16:50**

- 1、全水道会館・中会議室(5階)
- 2、JR・都営三田線水道橋駅下車徒歩2分

○電話:03-3816-4196

◎2月にゼミ予定の守屋会員が12月に逝去されました。享年93才でした。ここに、講演の紹介文を掲載し、謹んで故人のご冥福をお祈りします。合掌。

**「方形周溝墓から前方後方墳・前方後円墳—その築造規程」**

—ゼミ紹介文—故守屋 尚会員記

会員の皆様には、本テーマは重々承知して居られる既知の事項であるにも拘らず、敢えて採りあげたのは、その築造規程を知りたかったからである。実際、各地の古墳を拝見していると、外見の全貌がよく似ていると感じることが多い。従って、古墳築造に当たっては、なんらかの設計図のようなものが存在していたのではないかと想像する研究者が多いと思うが、今までそういう設計図そのものが発見されたことはないと言われている。

しかしその中であって、類似の古墳を比較し、どの点が類似面を生み出したかのポイントを探求され、設計の本質に逆に迫られた研究者が居られる。それが、ここで紹介する上田広範氏であり、1950年に初めてその骨子を発表された。概要は図表を使用して、当日ご報告しま

すが、実はこれに類するような研究が前方後円墳のみでなく、前方後方墳や、方形周溝墓についても行なわれていたことを発見したものですから、敢えてこういう報告をさせていただくことになった次第であります。

ところで、少々脱線しますが、人間がものを見て「美しい」と知覚するのは、どういう場合でしょうか。視界のなかに、きちんとした形の秩序を見出しときの刺激に基づくものであるという。

中でも人の心を引きつけやすいのは、左右対称のもので、自然の中での左右対称は、植物の花や果実、動物の立姿、人の顔面などに見いだされ、図形では円や正方形、正三角形などには安定感が感じられ、「良い形」として、さまざまな場面で重んじられてきた。対称や均等は優勢のしるしであり、それが、よい食物や配偶者を選ぶための指標となったからこそ、ヒトの心は、対称や均等のものに誘引されるようになったのだという説も根強い。(松木武彦著「美の考古学」より引用)

縄文時代ではすでに前期より、このような図形において「良いかたち」を発見することができる。鹿児島県の薩摩火山灰下から住居址、隆起紋土器(12800年前)が出土しており、同県下、中種子町・三角山遺跡では、直径2米の円形住居2棟が円形・船形配石炉6基とともに、発掘された(2002年)。同じく同市・下福元町・掃除山でも、2,6米四方、3,3米四方の竪穴住居、円形・船形で深さ30センチの中央炉が出土している。

中期中葉の岩手県・西田遺跡では、大型住居群が円形、半円形にならび、中央広場では墓壇群が放射状に円弧を描き、住居と墓壇が同心円を描いていた。

後期前半の大湯環状列石では、川原石を円形や菱形に並べた組石の集合体が、外帯と内帯とが二重の同心円状になるよう配置されている。

弥生中期前半の愛知県・清洲市・朝日遺跡では、直径7.6米の周壕をもつ2基の円形竪穴住宅が、四隅に陸橋を持つ全長30米の大型方形周溝墓を随伴していた。

このように、円形、正方形の住居址、同じく円形や半円形の墓壇址を見れば、縄文人自体良い形を承知しており、その形を最も重要なものとして、皆で合意して採用したのではないか。そういえば、毎日拝む太陽も月も円形であり、生活に密着した自然物である。

この報告で採りあげる前方後円墳、後方後方墳も方形・円形周溝墓も、すべて円形と正方形ないし台状形で構成された建築物であるから、外国から示唆を受けたかたちではなく、本来我が国伝統のみかたによるもの

と考え、上記のように推測した次第である。因みに、米国のドニス・A・ドンテイスは、「円形」からは、「無限と暖かさと保護」が、「正方形」からは、「単調と正直、直裁と職人氣質」を連想させると、述べている。

#### 方形周溝墓・円形周溝墓

弥生時代中期から終末期にかけ、環濠集落形態は後退し、徐々に力を蓄えた地域リーダーは、一般住居から離れて独立した首長居館に住むようになり、墓制でも共同墓地から分かれて、丘陵の高みに独立した方形周溝墓へ葬られるようになった。

我が国の方形周溝墓は、弥生終末期の八王子市・宇津木遺跡で初めて確認され、大場磐雄氏により命名された墓制であるとされる。勿論弥生前期前半にも、福岡県・筑前町・東小田遺跡にみられ、前期中葉には兵庫県・東武庫2遺跡や、大阪府・池上曾根遺跡でも確認されているが、型式として認定されたのが、八王子の遺跡が最初である。

方形周溝墓は、周囲を溝で四角に囲い、その中に低い墳丘を築いた墓で、内部に木棺を納める。被葬者を生活面より上部に葬ること、盛り土をすることに特色がある。

平面形態は、方台部が正方形と長方形とで分類され、近畿では周濠が全周し、東海では隅が欠ける形式が優勢である。

円形周溝墓は、弥生前期から中期にかけ、瀬戸内東部地域に出土し、特に岡山県・兵庫県・東四国で出土し、中期の加古川下流域では、円形・方形双方の周溝墓がみられた。

弥生末期には檀原市・瀬田遺跡で、全長26米、墳丘部直径19米、幅6-7米。深さ50センチの円形周溝墓が出現している。

#### その築造規程

方形周溝墓は整然とした形態となっておらず、歪んでいるものが多い。しかし、方台部の歪みを観察し墳形を重ね合わせる作業を繰り返していると、方台部の一隅が突出して歪んで見えるものが多いことに気づくものである。なお、ここで周溝墓の長さには周濠を含まない方台部の長さのみを対象とすることとしたい。

当日は実例に基づき、古墳時代初期の4基の周溝墓が同じように歪んでおり、他の地域のものを重ね合わせてみても(場合により反転させて)略々重なるのである。

また、同一墓地内の周溝墓全長が盟主墓の2分の1とか、後方墳全長に対し8分の6とか、整数での縮小化現象が指摘でき、平面形の規制が存在したのではない

かとお報告したい。

#### 前方後方墳

弥生中期には各地で方形周溝墓へと発展し、後期になると周溝墓の陸橋部分が肥大化し、突出した前方部となり、祭祀場として整備され前方後方墳となった。それは、主墳が方形で、長方形や逆台形の突出部が接合された墳墓である。古墳時代前期の東日本では、特に後方墳が4世前半まで支配的であり、また内部構造その他では、後円墳と同様である。

最初に学術用語として、「前方後方墳」の語が公表されたのは、島根県史を大正14年にまとめられた野津左馬之助氏とされ、先般永眠された大塚初重氏が、戦後問題提起された1956年当時は全国で26基、学位論文提出時には60基だったと回想されている。初めて茂木雅博氏が「前方後方墳」を1983年刊行され、211基を集録され、赤塚次郎氏が、愛知県・清洲市・廻間(はざま)遺跡を1990年調査し、東海の土器形式を「廻間式」と提唱し、最古段階の前方後方墳と位置づけた。ついで、植田史雄氏の滋賀県・能登川町・神郷亀塚(じんごうかめづか)遺跡の調査及び同氏著『「前方後方墳」出現社会の研究』(2007年)の刊行が続いた。2004 榎原考研特別展では512基が紹介されたが、後円墳に比べ約10分の1の出土数である。

#### 前方後方墳の築造規程

植田文雄氏が集録された111基を基礎として、後円墳と同じような築造規程の存在を仄めかすような事象が存在していないかを調べてみた。

植田氏は、次の条件に合致する古墳を選び、後方墳全体を基礎資料とされなかった。

- ①古墳全体の面積が700平方メートル以上、後方部のみの面積が400平方メートル以上のもの
- ②全長に対し前方部が40%以上へ拡大しているもの。
- ③3米以上高い墳丘と幅10メートル以上の濠をもつ古墳であること。
- ④2003年段階で。発掘調査報告書が刊行されている古墳であること。

これらにより、古墳全長(A)に対する前方部長(C)の比率:後方部長(B)に対する前方部長(C)の比率を古墳ごとに計算し、列挙してみると、(C)/(A)が略同一、(C)/(B)も略同一という9グループの古墳群の存在を実証することができた。9グループの件数は52件、46.8%に達するわけで、遠距離に離れた古墳の間に類似の形式が存在している事実は、人為的な操作が介在

していたものと考えざるを得ない。この点植田氏は指摘されてないし、他の著書にも、掲載されていないので、小員のための私案に過ぎないかも知れないが、指摘しておきたい。

#### 前方後円墳

数年前に刊行された「古代史講義」(佐藤信編・岩波)は、『初期ヤマト政権は、列島各地の「地域の王」たる有力首長の結集した広域政治連合であり、その最高首長たる盟主は、奈良盆地と大阪平野一部を加えた地域の首長層に推戴された「地域の王」でもあった。その墓は、初の前方後円墳である箸墓古墳に営まれた』と説く。

ここに広域政治連合は、一つには領域的氏族連合、二つには職掌型氏族連合を含むものと見られる。

前者は列島各地で土木・灌漑事業、穀物貢納・徭役などを基礎とする農業共同体複数を地域的にまとめて、部族連合とした在地の民族的結合いう。各地連合が広い範囲で結合され、各地から中央へ架構されるように、巨大古墳を築く中央の領域型氏族連合が結び合され、擬制的同族関係の枠組みが結成された。

後者は、各種財物の生産、広域流通網の管轄や分業調整などを行う上位階層が固定化された氏族連合である。中央から地方へは、実質財や労働力への対価やその印として、地方向けに各種象徴財(銅鏡・鉄剣・甲冑など)、祭礼・儀礼・武装等中央の活動管理対象物の授受と分配の役割を担った。

このように、中央の長と、各職掌を司る長らは、合意をもった協調関係を実現させ、個別地域勢力の再生産維持活動・補強のため協力し合ったことであろう。恐らくは相互の業務提携や婚姻などを通じて中央勢力を形成し、諸勢力の合意と付託をもとに、彼らの中から盟主を輩出・推戴したのであろう。

#### 箸墓古墳

箸墓古墳は4世紀初めまでに、大和東南部に誕生したが、それが象徴するものは、

- ①その隔絶した巨大性であり、全長280米、高さ29米、30万立方メートルの体積をもち世界各地の超高層建築物に匹敵するものである。
- ②その相似形ないし共通性がみられる古墳が存在することで、西殿塚古墳は箸墓の3分の2、元稻荷古墳は3分の1であるという。(前者は天理市、後者は京都府・向日市)。
- ③周辺諸地域の祭祀的伝統を融合したものである。

箸墓古墳はそういう三つの側面によって表現された宗教的建造物であり、初期ヤマト政権・最高首長の埋葬地である。これを見れば、各地で生起した葬送祭の集約と再構築であり、多大な労働力の投下であり、初めての新規測量・土木技術の駆使でもあった。

本古墳誕生にあたって、協調行動をとった氏族連合は、北九州(鏡など副葬品)、山陰(葺石・貼石)、瀬戸内中部、北部(特殊器台・埴輪)と東岸(円形墓)の諸地域に属し、西日本一帯の沿岸部で、弥生以降大陸や半島との交流が活発であった地域である。わけても、古墳築造には、畿内西側の世界からは、吉備の祭祀面をはじめ、イデオロギーや知識を、東側の尾張・伊勢の東海地区からは労働力がもたらされたことは確実で、この事は大和各地で出土した土器生産地が証明している。

このように、諸勢力が連携して協調行動をとる必要性が発生したとすれば、海外要因への対処ということが指摘できる。当時、後漢王朝の衰退と半島・三国分立状態に起因する内政事情の不安が看取され、不測の事態に対処できる最善の案を採択したものと推定される。

前方後円墳・築造規程——上田広範氏論考とその他

上田氏は、先学の後円墳形や編年観などの研究を多としながらも、数値の比較やグラフ活用による定量的研究が可能ではないかと、古墳の型式学的研究を実施された。その際依拠された推計学では、対象を母集団と標本に分け、任意抽出した標本についての知識から、母集団を推測しようとする方法であり、一部分の標本に基づき、全数の状態を判断するものである。標本が適切に選ばれ、調査項目が母集団の特性を示す適当なものであれば、ごく少数の標本でもよいことが判明している。最もシンプルな平面構成としては、(当日は図表を見てご説明する)

- ①後円部直径。②前方部長さ。③前方部の幅。
- ④前方部の開き具合の角度。⑤前方部隅角部の稜線
- ⑥古墳の中軸線の方位。

が決まれば、一応その平面形は構成できるわけである。従って、前方後円墳の型式表徴として、これらの平面構成要素を取ることが、最も合理的であると考えられる。

計測点もまた当日ご説明するが、墳丘の長さをBDで表現すれば、後円部の長さをBCで表し、前方部の長さをCDで表すことができ、更にCDは、前方部後長、則ちCPと前方部前長、則ちPDとに分けられる。

計測点の設定は上記の通りとして、それでは、これに則って、どのように計算するのであろうか。それは、BC:CP:PDの比率を三連比に置き換えて表示するわけである。

換言すれば、後円部の直径と前方部後長、それに前方部前長の比率を三連比にして表現するのである。推計学に言うところの数化である。

PDの数値は、土木工学にいうところの安息角と関連し、前方部の高さと幅を自ら規定することになる。

BCは、勿論 後円部の直径 を規定する。

ここで問題になるのは、CPである。これは平たく言えば、古墳の胴の長さを表すと言えるものである。

上記のように、計測に耐える条件をもつ古墳100例近くについて、計測してみると、凡そ次のような事項が判ってきた。則ち、BC:CP:PDの連比が、6:3:1とか、6:2:2とか、6:1:3とか、6;2;3とか、種々の数値での表現が可能となるのである。

しかしこのままでは、単に計測資料の集積に過ぎない。これに、推計学でいう資料の簡約化の操作を行わなければ、適切な解答を期待することはできない。それでは、その集約化の指標となるものは何か。

それは、PDとCPの数値の変化であり、これに基づいて、簡約、整理してみると、大きくは、次の3つのグループに分けることができる。

- ① PDの数値が、後円部半径の数値3より小さいグループ: A 型式である。
- ② PDの数値が、後円部半径の数値を示すグループ: B 型式I、B 型式II、C 型式、D 型式。
- ③ PDの数値が、後円部半径の数値3を上回る3.5 或いは 4.5 を示す E 形式。

この研究の全体像は、当日報告の「各地域における型式分布・編年表」を参照願いたい。

このように、簡約化には成功したが、これが安定した型式として認定できるかどうか、そしてこれが時代的な推移を示す、編年に連なるものかどうかという事である。

この操作が「型式の認定と編年」という大切な事項である。そこで肝要なことは、地域を限定して、文化伝播の時間的較差が少ない状況で操作を進めることと、年代特定のため、相対的年代がある程度既に判明している資料を介在させることが必要である。

上田氏は、推計学の導入により、みごとな成果を挙げられたことと、榮譽を讃えたい。(初出、1950年「古代学研究」、1978年、「考古学ジャーナル」発表)。

その他に型式学的研究者が多数居られますので、当日、つぎの3名の学説をご紹介します。

- ①小澤 一雅 説、②梶 国男(くぬぎ) 説、③宮川 徒 説 その他、6名の研究者が居られます。甘糟 健氏、平田 新芳氏、白崎 昭一郎氏、梅沢 重昭氏、堅田 直氏、西村 純氏。 以上。